

# いつも一緒に 富山のペットたち



井上 人士也  
井上動物病院長  
(高岡市野村)

今回は犬の不妊手術と去勢手術について、お話ししましょう。雌犬は生後1年前後で性成熟を迎え、妊娠が可能となります。生後8カ月ぐらいで最初の発情が始まり、その後は年2回の発情が生涯続きます。発情の時期にのみ、妊娠することができません。

この発情の時期に、体内で性ホルモンが放出されます。防衛本能が増し、一時的に性格や行動の変化が見られ、飼い主を困らせる問題行動を引き起こすことがあります。

雄犬も生後8カ月ぐらいで性成熟を迎え、雌犬を妊娠させることができます。発情は雌犬のように年2回ではなく、1年を通じ可能です。雄犬もこの時期から年中、体内で性ホルモンが放出され、攻撃性、優位性（人間よりも自分が優位だと認識すること）、遠ほえ、行く先々でのマーキングなどの問題行動を起こすことがあります。

これらの問題行動の原因となる性ホルモンは、卵巣や睾丸から出ます。犬の不妊手術（卵巣摘出）と去勢手術（睾丸摘出）は、さまざまな病気の予防や、

## 犬の不妊・去勢手術

不妊・去勢手術を行わなかった場合に かかりやすい病気	
病名	主な症状
<b>雌犬</b> ちくのう 子宮蓄膿症	子宮内で細菌感染が起こり、膿（うみ）がたまる。食欲が低下する、元気がなくなる、飲む水の量や尿量が多くなる
乳腺腫瘍	乳腺にしこりができ、少しずつ大きくなっていく。悪性のタイプが多い。肺へ転移し、肺がんを引き起こすこともある
卵巣腫瘍	大部分が悪性。症状は特になく、早期発見が難しい
<b>雄犬</b> 前立腺肥大	排便・排尿障害、血尿、歩行障害が現れる。排便・排尿障害のため会陰ヘルニアになることもある
肛門周囲腺腫	初期は症状がない。腫瘍の一部が破れ、出血することがある
こうがん 辜丸腫瘍	悪性貧血、全身脱毛、乳頭・乳腺の肥大、巨大化した腫瘍による歩行障害などが起こる

肛門周囲腺腫も、性ホルモンの影響のため、主に肛門の周りに多発する腫瘍で、悪性のタイプもあります。腫瘍の一部が破れると、出血してしまいます。辜丸腫瘍は7歳以上で発生するケースが多く、正常に陰嚢内に下りていない辜丸に発生しやすいことが分かっています。悪性のタイプが多々、悪性貧血、全身脱毛、乳頭・乳腺の肥大、巨大化した腫瘍による歩行障害を引き起こします。当院で昨年1年間に行った犬の手術の23%は、これらのいずれかの病気です。早期に不妊・去勢手術をしていれば防げる

性ホルモンの動きを止める目的で行われます。

**食欲が低下**  
それでは、不妊・去勢手術を行わなかった場合、どんな病気になる可能性が高いのでしょうか。

雌犬の代表的な病気を三つご説明します。子宮蓄膿症は、発情期に子宮内で細菌感染が起こり、膿がたまる病気です。食欲が低下する、元気がなくなる、飲む水の量や尿量が多くなるといった症状が現れ、重

雄犬の代表的な病気も三つ挙げ

# さまざまな病気防ぐ

まず、雌犬の代表的な病気を三つご説明します。子宮蓄膿症は、発情期に子宮内で細菌感染が起こり、膿がたまる病気です。食欲が低下する、元気がなくなる、飲む水の量や尿量が多くなるといった症状が現れ、重

雄犬の代表的な病気も三つ挙げ

「いつも一緒に 富山のペットたち」は、毎月第1木曜日に掲載します。

お近くの動物診療施設で、手術の時期や費用の相談をしていただきたいと思います。

早いうちに、  
い主の方もつらい思いをするはずですよ。  
できるだけ

2013(平成25)年3月7日  
北日本新聞